

私は昨年5月より、アメリカのヒューストンで暮らし、現地の高校に通っている。最初は英語を学ぶことに必死だったが、段々と仲の良い人もでき、宗教に関しても他者と話す機会が自然と増えていった。

日本人と比べ、アメリカ人はキリスト教徒の方の割合が非常に高い。人生のほとんどを日本で過ごしてきた私は神道、そして仏教以外の宗教についてあまり知識がなかった。キリスト教に対しても無知がゆえ、暫くは不信なもののように感じていた。

私の初めての親友は、アメリカ人のサラ。国語の授業で隣の席になり、私が現地の生活に慣れない時から、優しく接してくれた。サラは、熱心なクリスチャンで、幼い頃から教会へ通い、現在は教会のユースグループのリーダーとしても活動している。彼女はいつも聖書を持ち歩いており、聖書のそれぞれのページには、その内容に対するサラなりの解釈や、他者の意見もびっしりと書かれていた。アメリカでは聖書を毎日読むだけでなく、サラのように書き込みをし、より深い理解を求める人が多くいる。無知な私は、そこも不思議だった。仲良くなって暫く経ってから、私は彼女に信じている聖書の内容に、どうして自分や他者の解釈を書くのか、思い切って聞いてみた。すると、

「聖書は、私にとって大切な道しるべ。ただ、そこには色々な解釈があって良いと思うの。だから、私は他者の意見も聞き、自分の価値観に照らし合わせながら、より理解する努力をしていきたいの。」

と、説明してくれた。この言葉を聞き、キリスト教徒の方が、その教えにただ盲目的に従っているのではないと理解できた。宗教に限らず、幼い頃からふれた考えや習慣は、自分達が強く信じるものとなったり、変え難いものになったりすると思う。ただ、それが間違った方向へ向かえば、自分の信じるものを曲げられなかったり、他者の考えを認めることができないことへ繋がってしまう。だからこそ、サラはその教えを間違っ理解しないよう聖書を読み込み、他者の意見も取り入れながら、その解釈に努めているのだと思った。

そう考えると、私の偏見は、とても恥ずかしいものに思えた。それぞれが、それぞれの手段で人生において大切にされるべきものを探している。だからこそ、それは尊重されるべきものだと気づいた。

へブル人への手紙第十一章十三節の「地上では旅人であり寄留者である」。サラが教えてくれた。私はまだまだ未熟だ。人生の長い旅の中で、自分にはない考えや習慣にふれることがあると思う。その時、まず相手の考えを知ろうとする努力をしたい。そして、自分の考えを大切にすることは勿論だが、他者の大切にしている考えを尊重できるよう、努められる人でいたい。それが、真の相互理解にも繋がっていくと考えるからだ。サラの聖書に対する向き合い方から、その事を教わった。